

巻 頭 言

情報科学研究センター所長

小 淵 洋 一

『城西情報科学研究』は、今回で第14巻になります。本研究は、第11巻から研究論文についてはレフェリー制度を導入し、新たにスタートしましたが、多くの先生方にご投稿頂き、深く感謝致しております。

さて、今回は「マルチメディア教育」に関する特集号とさせて頂きましたが、それを実践されている7名の先生からご投稿頂きました。その中心は、マルチメディア教材の開発とその実践となっております。本学では、まだすべての教室にはマルチメディア装置が設置されていませんが、昨年度経済学部ゼミナール室にはすべてその装置を設置することができました。ゼミナール室については、ハード面では装置が整いましたが、その活用は思うように進んでいないのが現状であります。そのような状況を打破する意味でも、今回すでにマルチメディア教育を実践している先生方からその活用をご報告頂いたことは非常に意義が大きいと思います。

マルチメディア教育に関して、今でも鮮明に思い出すことがあります。それは、1999年6月私情協の情報教育フォーラムで、早稲田大学文学部の井桁教授によって行われた『「ドストエフスキーの罪と罰」と聖書』という授業の実演です（より詳しくは『私情協ジャーナル』Vol. 8 No. 2, 1999年を参照して下さい）。まさにその授業は、私たちの目指しているマルチメディアインターネットの21世紀型授業でありました。その時、同時に感じたことは、これだけのマルチメディア授業教材を毎時間作成しなければならない労力の大変さでした。少なくとも、その教材作りをサポートするスタッフが何人かいないと難しいのではないかと思いました。この井桁先生の授業は、大学に行かなくても24時間自宅でも聴くことができるので、先生は大学での授業の出席率が下がるのではないかと当初心配したそうであります。しかし、実際にはその出席率はアップしたとのことでありますから、マルチメディアインターネット型の授業は大学での生の授業を充実させるためにも重要であることを痛感しました。

本学においても、マルチメディア授業が進んではいますが、この井桁教授のような24時間聴ける21世紀型の教育システムは実現されていません。今後とも、情報科学研究センターでは、そのようなシステムが実現されるよう、ハード面、ソフト面の充実を図って参りたいと考えておりますので、みなさまのご指導宜しくお願い申し上げます。